

後回しの配慮

——注釈の談話標識「ただ」「実は」——

甲田直美（東北大学）

要 旨

前の表現に後から何かを付け加える表現「ただ」「実は」について、それぞれが担う配慮について、前後件の関係から考察した。「ただ」によって主張を限定させて後ろから付加することにより、相手の主張を否定せず、配慮した言い方となっていた。「実は」は背後にある理由を相手と共有することで配慮を示していた。「実は」は談話の範囲のその部分にのみ、あえて事「実」だと表示することによって、その部分が特別な事情であることを相手と共有する。どちらも談話内での機能を援用して、前後の文脈の受け渡しの中で配慮を示す標識として用いられていた。

キーワード:注釈、副詞、接続詞、談話標識、配慮

1. はじめに

本稿では、前の表現に後から何かを付け加える表現「ただ」「実は」について扱う。これらは、「ただ」は接続詞、「実は」は副詞相当と考えられるが、以下に述べるように機能として共通した側面があるため、本稿では「談話標識」としてともに扱う⁽¹⁾。

以下に「ただ」「実は」の例を挙げる。

次は2人の会話で「ただ」が用いられた例である。話者 JFB021 の「(台湾の)生活費ってそんな高くないイメージがある」という前件に対し、話者 JFO016 は、それを真っ向から否定せずに、「そうですね」と相手の意見を認めつつも、「ただね」以降、反対の見解(台北だと家賃は結構する)を小さく限定して述べている。「ただ」は、相手の述べたことを否定せずに、反対意見を控えめに付け加えるのに用いられている。

(1)

- JFB021 生活費ってそんな高くないってイメージがあるんですけど。
JFO016 そうですね。
JFO016 =ただね、やっぱり台北だと、(うん) うん、あの、借りる住居のね、
(うん) 値段、お値段がね、家賃は結構するんですよ。
JFB021 あー、(んー) そうなんだ[小さい声で]。
JFO016 で、食べ物は安いんですけど、(うん) 作ってあるね。
JFB021 うん。
JFO016 でも他の生活のこう雑貨みたいな(うん) はあんま安くないんで。
JFB021 そうなんだ。(BTSJ コーパス、以下、下線は筆者による)

逆接の「でも」や否定「いや」などと異なり、「ただ」は相手の意見を認めつつ、相手への否定を小さく付け加える。この点で、相手との対立を避け、両方の意見を認める配慮が感じられる。

次は「実は」の例で、待ち合わせに遅れたため、謝罪をする場面である。相手を待たせた理由が「実は」以下で打ち明けられる。

(2)

JF159 ごめんね、「JF160 名」お待たせしちゃって。

JF160 あー、<え、うん>{<}。

JF159 <えーとね>{>}、実は電車が止まっちゃって(あー)、申し訳ない、それで、あのう電話したんだけど(うん)なかなか繋がらなくて(あーいえいえ)ごめんね待たせちゃって=。

JF160 =もしかして「路線名 1」?。(BTSJ コーパス)

話者 JF159 は「実は」以下、遅れた事情を聞き手に打ち明け、事情が相手 JF160 と共有される。「実は」を用いることによって、話し手は内部の事情を打ち明け、相手と共有しようとしていることが示され、そのことが謝罪として誠意あるものとなる。すぐには知り得ない事情を聞き手と共有することで話し手は聞き手との距離感を縮めている。この点で「実は」も配慮に関わる表現だと考えられる。このように謝罪や依頼の場面で「実は」は多用されるが、話し手による何らかの配慮と関わっていると考えられる。

本稿では「ただ」「実は」について、それぞれどのような内容を導き、配慮がなされているか、考察する。

2. 先行研究

工藤(1981)が叙法副詞(叙法副詞とは、いわゆる陳述副詞の一部)として挙げた項目には、「確認・同意」として「なるほど、確かに、いかにも」、「うちあけ」として「実は、本当は、正直(言って)」、「証拠立て」として「現に、事実、じっさい」、「観点～側面」として「正しくは、正確には」などが挙げられるが、本稿で扱う「実は」は「うちあけ」として含まれている。

「ただ」については、川越(2003)は「ただ」の「聞き手配慮」に着目し、「見せかけの重点はずし」とでも呼べばいいような用法で、相手に押しつけがましく聞こえないようにするために、わざと、重点を置いていないように導く「ただ」を用いていると述べている。そして、「なお」は「ただし」同様の制限的補足にも使うが、単なる情報の付加を表すことが多く、「ただし」に比べてさほど重要でない付け足しの情報という意味合いを持ち、客に対するお知らせの掲示によく使われると述べている。

(3)

台風襲来のため風速が毎秒 25m 程度になったときは、電車の運転を一時休止いたします。なお、台風通過後の被害状態によりましては、電車の運転が困難な場合も予測されますのであらかじめご了承ください。駅長

(阪急電車 淀屋橋駅掲示、川越 2003:90)

そして、ほんの僅か前件の内容に反する評価を付け加えるのが「ただ」なら、前件の内容に客観的な条件付けをするのが「ただし」だと言えよう、として次の例を挙げている。

(4) 明日は文化祭準備のため授業はありません。ただし、係の生徒は 7 時までには投稿すること。

(5) ?明日は文化祭準備のため授業はありません。ただ、係の生徒は7時までに投稿すること。

(5) のような例は、評価を伴わないから「ただ」で言い換えることはできない、とされる。

これは副詞を事例とともに扱った飛田・浅田 (1994) による「ただ」の記述と一致する。それによると、「ただ」は条件や例外を付加するだけで、重点はあくまで前件にあり (268)、「ただし」は「表現としてはかなり冷静で、特定の感情は暗示されていない。また、付け加えた条件や例外が全体に影響する重要な意味を持つ点にポイントがあり、意識としては後文の方に重点がある。(268)」とされる。

これらの研究では「ただ」「ただし」「なお」は、単に、スタイルの違いとしてだけではなく、評価性の有無や重点の置き方に違いがあることが指摘されている。これらの特徴が積極的に話しことばで多用される一因となっているのではないだろうか。

後文で付け加えられる文の内容については、川越 (2003) では、「ただ」の用法としては、「前文の内容を一応肯定的に (「好ましい」こととして) 述べてから、後文で逆の「好ましくない」(マイナスの) 評価を補足するという例が顕著であるといってよい (92)。しかし、「前文が「好ましくない」もので後文が「好ましい」評価の補足という組み合わせの用例も多くはないが観察される (92)」、「前文が「好ましい」事柄であることは絶対条件ではない。ただ、そうなる場合がわれわれの言語行動の性質上多いというだけだろう (92)」と述べられている。

これらの記述は「ただ」が会話で配慮に用いられる点を指摘したものであり、重要である。本稿では、何かを付け加える際の表現として、「ただ」に「実は」を加え、これらの表現の持つ談話内での機能から、なぜ配慮の意味が生まれるのかを探る。

例えば「ただ」は前件とは逆の主張を小さくして付け加える点に特徴があり、「実は」はその部分だけが事「実」であるという文字通りの実質的意味は希薄化しており、前後の文脈より一步踏み込んだ重要な事実を提示することが謝罪等において誠実さを醸し出している。「ただ」と「実は」はそれぞれ接続詞、副詞として整理されることが多いが、共通してどちらも前後の文脈 (例えば相手の主張) をくみ取りつつ配慮の機能を担うものである。このような特性に着目し、これらの表現の前後の意味関係と配慮について考察を進める。

3. 後回しにすることはなにか

本節では「ただ」「実は」の前後の意味関係から生まれる配慮について考察する。

3.1. 「ただ」

次の例では、第1文はペルシャ猫について良い点を、第2文は「ただ」以降、ペルシャ猫についての難点を述べている。

(6) ペルシャ猫は毛並みがふさふさで、とってもかわいい。ただ毛代わりの時期は掃除が大変だ。

「ただ」は、前の表現に後から別の側面を付け加える表現である。もし「ただ」を付けずに次のようにすると、2つの文における視点の一貫性を欠く。

(7) ?ペルシャ猫は毛並みがふさふさで、とってもかわいい。毛代わりの時期は掃除

が大変だ。

「ただ」によって「別の側面ですよ」ということを明示しないと、前文との関わりが分からなくなってしまう。このことから、「ただ」は他の接続詞と同様に、視点の一貫性に寄与していることがわかる。この例で「ただ」を「でも」に置き換えることも可能である。

(8) ペルシャ猫は毛並みがふさふさで、とってもかわいい。でも毛代わりの時期は掃除が大変だ。

「でも」を用いた場合も、ペルシャ猫について良い点（とってもかわいい）と難点（掃除が大変だ）を別の観点から述べるという点は共通している。しかし、「ただ」の場合には前文に重点があり、前文に後文を限定して付け加える点で「でも」とは異なる。「ただ」に限定性があることは、付け加える際に「だけ」、「ちょっと」など限定性を含む表現と共起しやすいことからもうかがえる。

「ただ」について、飛田・浅田（1994）は肯定的な内容の前文にあまり好ましくない補足を追加することで、全面的な肯定を保留するというニュアンスで、話者の不本意さを暗示する、ややマイナスイメージの語（267）と述べている。この記述は、次の例の対比で明瞭になる。

(9) ペルシャ猫は毛並みがふさふさで、とってもかわいい。ただ毛代わりの時期は掃除が大変だ。

(10) ペルシャ猫は毛並みがふさふさで、とってもかわいい。ただ残念なのは毛代わりの時期は掃除が大変なことだ。

のように、基本的には前文の主張を保持しつつも限定したマイナスの事柄、しかもそれは話者にとって不本意なこととして後文で付け足される。

後文で好ましくないことが前文に付加される場合には、限定して小さくして付け加えられることが多く、「ただ」が配慮上、好んで使われる。特に会話の受け渡しにおいて相手の意見に反する見解を述べる際には、限定して述べる配慮として用いられる。

次の会話では、相手とは別の見解が「ただ」以降述べられる。相手の発言の全否定を避け、限定した形で付加される。震災時、（停電で）信号が止まり、怖かったことが話者 A によって述べられるが、話者 B は信号が止まったことについての悪い点を述べるのではなく、良かった点「（信号が）止まってながらもスムーズに動いていた」ことを付け加える。このように相手との対立を「ただ」で小さくとどめつつ述べられる。

(11)

A：やっぱ（.）信号が::全部（.）止まってたんで

B：はい

A：.hh 結構身の危険 h を感じながら

B：帰るのあれこわ::

A：怖 h かったですね：（0.5）車も::なかなか

B：ただでもあれスムーズに動いて（0.5）ました[ねそれで止まってながらも

A： [そうですね:意外に:

B：結構みんな譲り合ってて （TEQCSJ コーパス）

この例にあるように、「ただ」の後には必ずマイナスのことではなくプラスの場合もある。

後件がマイナスの事態ということが重要なのではなく、前件を否定する事柄である点に特徴がある。相手を否定する点で配慮が必要となり、「ただ」が用いられる。しかし、前件に良い点が、「ただ」以降の後件に悪い点となることが多く感じられるのは、限定されるのは悪い点であることが多く、良い点を付け加えるのであればわざわざ限定して付け足す必要はないためである。コミュニケーションは相手との一致を求め、対立は最小限に配慮される。「ただ」は不一致を少しでも減らすべく用いられるのである。

3.2. 「実（じつ）は」

「実は」について飛田・浅田（1994）では「本心を吐露する様子を表す。ややマイナスよりのイメージの語。」（185）と記載される。

(12) ちょっとすみません、実は…

という点必ずしもマイナスの事象でなくとも、何か深刻な内容が後続するような気がする。

(13) （医者が患者の家族に）実は余命はあと3ヶ月です。

というような例も、医者が重大な事実を告知する場面であるが、悪い場面に多く用いられるように思われる。もし、検査の結果が大丈夫だったという場合、「実は」は想定外の場合には用いられうるかもしれないが、何も想定がない場合には「実は」の後は悪い事態が多いように思われる。それはなぜかという点、私たちのコミュニケーションは、基本的に良いことよりも悪いことの方が扱いに慎重であることが求められるからではないだろうか。良いことについては談話標識などを重ねることもなく伝えることができても、悪いことについては予告してから述べる方が丁寧なのではないだろうか。

(14) 実は私、来月結婚するんです。

のように話し手本人にとって良いニュースの場合もあるけれども、意外に思っていたことや、これまで明らかになっていなかったことをその場で開陳する場合であって、聞く方にとっては心の構えが必要な、重要な知らせとして受け止める必要があるものである。にもかかわらず「実は」以下で伝えるのは、それが重要な事実であることを明示し、それを相手と共有することによって、相手が共有すべき人物だと見なしているということを示すことができるからである。

「実は、本当は、正直（言って）」は藤原（2011）、甲田（準備中）では真実性の副詞として扱われるものの一部である。真実性の副詞は事実や真実であることを述べる副詞で、これら以外にも「本当に」「実際」「まことに」「事実」、新しいものでは「まじ（で）」などがある。真実性の標識は強調表現としても使われる。甲田（準備中）で述べたように、真実を話している中で、あえてその部分が真実であるとマークする場合、余剰に真実性について述べていることになる。この余剰性が強調の解釈につながる。本稿で扱う「実は」についても、事実を述べている中でその部分を取りわけ「実は」とマークすることで、重要性あるものとして解釈される。また、真実性の副詞でも「実は」「本当は」のように「は」を含むものが対比性が感じられ、後から注釈を付け加える機能を担っていると考えられる。

同じく対比の「は」を含む「本当は」については、想定していたこととは異なることを対比的に示す。「本当は」は「実は」と比べて対比される要素が必要であることが多い。「本当のこと」と対応する事態を想定しており、(15)では外見（人間の女性）、(16)では実現

しなかった意思と対比されている。

(15) 私は本当はあの日助けてもらった鶴なんです。

(16) 本当は僕が行きたかったけど、用事で行けなかったんだ。

依頼で使われるのは「実は」である。

(17) 実は折り入って頼みがある。

(18) ?本当は折り入って頼みがある。

(18) が可能な場合としては、依頼したいことがないと想定されていた場合など、何かに対する「本当」のこととして述べられる。

「ただ」「実は」「本当は」は、他と対比し、限定して述べる点で共通しており、この限定性が後から付け足したり（「ただ」）、秘密の開陳（「実は」）に用いられたりする。「実は」も秘密の開陳をこれまでためらっていたニュアンスを与え、それがこれから話す談話がこれまでの性格と異なるものであることを予告する機能がある。「実は」「本当は」は対比の「は」によって限定性が生まれる。

例えば「じつに」は飛田・浅田（1994:184）で述べられるように、程度がはなはだしいことに感慨をもっている様子を表すが、プラスマイナスのイメージはない。

(19) 彼の演技はじつに素晴らしい。

その部分にあえて「実は」と「は」で限定し、対比的に明示すると、聞き手は何か特別の意味があると解釈する。それが何かということ、あえて事実であることをことさら明示するほどに重要なことだというわけである。そして重要なことというのは、折り入って話すようなこと、聞き手にとって負担のある事象であることが多いのではないか。

4. 謝罪や依頼における「実は」の丁寧さ

次は、インターネット上に掲載されている、ビジネス文例集の一例で、納期遅延によるお詫び状である。この中で、「実は」は注文殺到による生産遅延の下りで用いられている。

(20)

謹啓 平素は一方ならぬお力添えにあずかり誠にありがとうございます

さて 先般○月○日付にてご注文をいただきました○○○○が納期遅延となりましたこと多大なご迷惑をお掛けしたいへん申し訳ございませんでした

深くお詫び申し上げます

実は このたびご注文いただきました○○○○は 各方面からの注文が殺到しましたため 工場生産が需要に応じきれない状況で当初の予定より遅れてしまいました

ただいまフル操業をいたし鋭意製作中でございますので 改めて○日ほどの延長をお願い申し上げます

今後はこのようなことのないよう管理を徹底してまいりますので このたびの件はなにとぞご容赦賜りますようお願い申し上げます

まずはお知らせかたがたお詫び申し上げます

謹白

令和○年○月

株式会社○○ ○○

(遅延のお詫び状 (ビジネス・会社用))

https://www.printmate.co.jp/postcard/model_904.php, 2020年12月30日最終アクセス)

真摯に誠実に謝罪がなされていると仮定される環境にあつて、「実はこのたびご注文いただきました〇〇〇〇は 各方面からの注文が殺到しましたため 工場生産が需要に応じきれない状況で当初の予定より遅れてしまいました」の部分にのみわざわざそれが事実であるという標識を付加している。この文脈では、客側には知り得ない遅延の理由を「実は」が導いている。「実は」が内情の開陳を表し、相手と共有することで、丁寧さや配慮を高めるために使用されると考えられる。(明かされていない) 真実性を共有することが、誠実性をアピールし、謝罪や依頼を効果的にするために用いられる。

次は、甲田(準備中)で示した事例で、依頼を切り出す部分の前置きに「うーんと実は、国立国語研究所ってわかる?。」と「実は」が用いられている。言語調査の依頼を JFB が JFSa にするのだが、依頼内容は抜粋の後半に出てくる。依頼の切り出しで「実は」が多用されるが、なかなか本当のことが言えずにいたニュアンスを与える。言い出すまでの苦労が丁寧さを生む。

(21)

JFB010 明日の午前中って暇?。

JFSa010 午前中、えっ?、えっ、ちょっとなら。

JFB010 ちょっと、ちょっと?<笑う>。

JFSa010 うん。

JFSa010 <笑いながら>あいやいやいや <2人で笑う>。

JFB010 <笑いながら>あのね(うん)、明日なんかあの友、うーんと実は、国立国語研究所ってわかる?。

JFSa010 えっ、あ、聞いたことある<けど>{<}。

JFB010 <あー>{>}、なんか私がそこでちょっと言語調査に関する実験を頼まれていて、(うん)それに行かなきゃいけないんだけど、(うん)ちょっと急用ができて行けなくなってしまったのね。(BTSJ コーパス)

次も甲田(準備中)で示した例で「実は」はいろいろ逡巡してやっと実情を打ち明けることで丁寧さを生んでいる。

(22)

JF167 いやなんかね[息を吸う]、なん、か実はすごい言いづらいんだけど(うん)、ちょっと「JF168名」に相談があつて(うん)、うんー、なんかあのバイトのことなの。

JF168 うん。

JF167 なんかさ、今紹介した、あの、今のバイトさ、「JF168名」に紹介してもらったじゃん、結構無理言つて。

JF168 うんうん。

JF167 なんかさすごいなんか、いい感じの所だったから。

JF168 うん。

JF167 なんだけど、うん、なんか、実は辞めようと思ってて…。(BTSJ コーパス)

謝罪における内情の開陳は、真相を共有し、距離を縮めることによって人間関係を調整しようとしている。真実性の標識は、あえてメタ的にそれが事実とマークするということは、有標であり、その発言自体が何らかの企みをもっている。あえてメタ的に確信や信憑性について言及するということは、単に事実というのではなくて、その後になりたいことが述べられる。会話相手と共有したい真実性や事実性を、これらの標識でマークし、相手に示す。

5. 注釈の接続詞

本稿で扱った「ただ」は甲田(2001)に挙げた接続詞のうち、補充を表すものに分類される。本節では、前後の関係づけについての特徴を記述する。

次の同帰、補充、解説の関係を表すとされたもの(注釈の接続詞)は、もとの表現を1つの文にした接続を想定しにくい。

【同帰】 つまり・つまりは・要するに・たとえば・すなわち・いわば

【補充】 なお・ただ・ただし・もっとも・ちなみに

【解説】 なぜならば・なぜかという・なぜかといえば・なぜなら・なぜって・だって・と申しますのは・というのは・ということは・というのも(甲田 2001)

接続詞には同様の関係を接続助詞を用いた関係で示せるものがある(甲田 2001)。

(24) 魔法の粉を入れた。そして上下に振ってみた。

上の例を1文で書き換えると、例えば、次のように接続助詞を用いた接続ではなく、動詞の「～テ形」や連用形を用いた接続となる。

(25) 魔法の粉を入れて、上下に振ってみた。

(26) 魔法の粉を入れ、上下に振ってみた。

これに対して、同帰、補充、解説の関係を表す独立した2文を1文で表現することはできない。

(27) ペルシャ猫は毛並みがふさふさで、とってもかわいい。ただ毛代わりの時期は掃除が大変だ。

次のように1文にすると、後から後件を付け加えるというニュアンスは伝わらず、文の視点の一貫性がないものとなる。

(28) ?ペルシャ猫は毛並みがふさふさで、とってもかわいくて、毛代わりの時期は掃除が大変だ。

(29) 甲田(2001)で示した接続詞、接続助詞の対応

【注釈】 【転換】 【条件(順接・逆接)】 【展開】 【添加・並列】 【選択】

<一文中の接続が不可能> <一文中の接続が可能>

<接続助詞の想定不可能> <接続助詞がある> <接続助詞が想定できない>

本稿で扱った「ただ」は、後から前件に制約や条件を付け加えるものであり、何かを述べた後に付け足すという特徴が会話での配慮を表す際に用いられている。一方、「実は」は

甲田（2001）で接続詞として扱ったものではないが、談話全体の中で特定の部分のみに事実性を明示することで他の部分との差異を示すことができ、これが談話内で強調などの機能を担っている。

6. おわりに

本稿では談話標識「ただ」「実は」について考察した。どちらも飛田・浅田（1994）で述べられるようにマイナスイメージのことがらを導くとされているものであるが、はたしてそうなのか、会話例などを見ながら検討した。確かにマイナスの事柄を導くことが多いが、「ただ」については必ずしもマイナスのことがらだけではなかった。「ただ」は前件とは別の方向の主張を前件を否定せずに付加する際に用いられていた。「ただ」によって主張を限定させて後ろから付加することにより、相手の主張を否定せず、配慮した言い方となっていた。一方、「実は」は通常知り得ない、情報価値のある事柄を相手に差し出すことが誠実さを演出していた。例えば謝罪文で「実は」以降、理由を打ち明ける場合など、背後にある理由を相手と共有することで対立を緩和する効果があると考えられる。これらの表現はどちらも人間関係に配慮した表現として用いられている。談話標識の中には、これらのように配慮に好んで用いられるものがある。

談話標識は一文内だけではなく談話内での機能を担うため、前の主張への関係を表示しつつ、後件が述べられる。このことが、例えば「ただ」は前件に反対する主張であっても小さくして付け加えることで配慮を示し、「実は」は談話の範囲のその部分にのみ、あえて事「実」だと表示することによって、その部分が特別な事情であることを相手と共有する。どちらも談話内での機能を援用して、前後の文脈の受け渡しの中で配慮を示すことが出来る標識として用いられている。

注

(1) これらの語の品詞論的所属をどう捉えるかは、本稿の目的ではないが以下に特徴を記す。

「実は」「本当は」は、名詞に助詞「は」が付いたものであるが定着しており副詞と考える。

接続詞は他の品詞からの転成や複合からなるものが多く、その事情は副詞も同様である。

副詞、接続詞は品詞論的に境界がはっきりしたものではなく、そもそも連用修飾成分であることと前後の関係を明示する機能とは相反するものではない。

会話データ

宇佐美まゆみ監修（2020）『BTSJ 日本語自然会話コーパス（トランスクリプト・音声）2020年版』、国立国語研究所、機関拠点型基幹研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」、サブ・プロジェクト「日本語学習者の日本語使用の解明」（リーダー：宇佐美まゆみ）

TEQCSJ コーパス（Tohoku Earthquake Corpus of Spontaneous Japanese）、2011年から2013年に大学生、大学院生による会話を収録したものである。2012～14年度科学研究費補助金（基盤（C）24520415「自然談話文法構築のための、談話標識の機能に関する実証的研究」、研究代表者 甲田直美）の助成による。

本研究は、2018～21年度科学研究費補助金の助成を得ています（基盤（C）15K02468「自然談話構造理解のための、音声・変異動態に基づいた談話標識の研究」研究代表者 甲田直美）。

参考文献

- 川越菜穂子（2003）「補足の接続詞「ただ」「ただし」について--〈聞き手配慮〉を使用条件にした分析」『人間文化学部研究年報』（5）帝塚山学院大学，82-101.
- 工藤浩（1981）「叙法副詞の意味と機能—その記述方法をもとめて—」
<http://www.ab.cyberhome.ne.jp/~kudohiro/modal_adverb.html>, 2020年9月22日参照
- 甲田直美（2001）『談話・テキストの展開のメカニズム—接続表現と談話標識の認知的考察』風間書房
- （準備中）「真実性に言及する談話標識」齋藤倫明（編）『語彙論と文法論をつなぐ—言語研究の拡がりを見据えて—』ひつじ書房
- 飛田良文・浅田秀子（1994）『現代副詞用法辞典』東京堂出版
- 藤原浩史（2011）「真の情報を導く副詞の形成」『文法記述の諸相』中央大学出版部, pp. 41-64
- 山岡政紀（2019）「配慮表現の原理」『日本語配慮表現の原理と諸相』くろしお出版

（甲田直美、東北大学教授、naomikoda@gmail.com）